

中村 繁夫 氏 [アドバンストマテリアルジャパン社長]

希少金属追う現代の山師

日本の産業競争力向上に欠かせないレアメタルを調達する“山師”。学生時代にブラジルへの移住を志し、就職後もアジアの辺境を渡り歩く。2004年にMBOにより独立。ロマンを胸に、世界各地を「探険」する。

「現代の山師」

そんな異名を持つ男が、東京・赤坂のビジネス街にいる。押し出しの強い体格に愛嬌のある風貌。大きな声で関西弁を操り、常に笑顔絶やさない。時折険を見せるとは相手の懐に入り込み、いつしか聞く者を自分のペースに巻き込んでしまう――。

その男の名は中村繁夫。レアメタル(希少金属)専門商社・アドバンストマテリアルジャパン(AMJ)の社長だ。

こう書くと、山師という言葉が持つネガティブなイメージが思い浮かぶかもしれない。しかし、そんなイメージに惑わされず、上の言葉を額面通りに受け止めてもらいたい。なぜなら中村は、鉱山開発や鉱石販売に携わるといって、本来の意味での山師だからだ。

中村が扱うレアメタルは、世界的に生産量が少くない31種の鉱物の総称。「産業のビタミン」とも呼ばれ、自動車や家電など幅広い産業で、なくてはならない素材として使われている。日本の産業競争力は、レアメタルに支えられていると言っても過言ではない。

しかし日本国内には採掘可能なレアメタル資源はなく、ほぼ全量を海外からの輸入に依存している。その一方で、資源確保は困難になりつつある。中国などの資源国が、輸出規制の動きを強めているからだ。

こうした状況で本領を発揮するのが、中村のような本来の山師だ。自らの足で世界各地を回り、独自の視覚で資源を探す。そしてリスクを取って鉱山開発に参画し、レアメタルを日本に供給する。自らを「探険家」と称する中村にとって、願ってもない時代になりつつある。

AMJは、日本に輸入されるスポンジチタン(チタン原料の一種)の約8割を押さえ、レアアースやタンクステンでも高いシェアを占める。

原動力となっているのは、中村の尽きることないバイタリティーだ。これまでに訪れた国は77カ国。特に中国には170回以上足を運んだ。社員の先頭に立って辺境の地に向かい、人懐っこい笑顔で浮かべては交渉をまとめてくる。「現代の山師」という異名は、そんな中村に対する“尊称”とも言える。

還暦を間近に控えた今も、精力的に資源を探し回す中村。興味があれば、世界中どこへでも足を延ばす。その冒険心は学生時代の「移民経験」からもうかがい知れる。

ヒッピーからトレーダーに

静岡大学に入学し、大学院に進んで木材工業化学を研究していた中村は、ある日、無性に旅に出たくなった。「子供の頃から「男たる者、狭い日

本に閉じこもってはいかん」と言われ続けて育った。親類がブラジルに移住したこともあり、木について学んでいくうちに、どうしてもアマゾンの密林が見たくなかった」

募る思いを断ち切れなくなった中村は、1971年、23歳の時に大学院を休学。森林資源の調査という名目で飛行機に飛び乗った。日本に帰るつもりはなく、本気で移住を考えていた。

中村を迎えたのは、アマゾンの豊富な森林資源、そして地下に眠る鉱物資源だった。当てもなくブラジル全土を放浪し、現地駐在の商社マンの家を転々とする日々。「まるでヒッピーのようだった」と中村は振り返る。

しかし憧れはやがて失望に変わる。移住すると決めて日本を出たものの「1年も住むと嫌なところが見えてくる。ブラジルは政治家の汚職がひどすぎて、将来性を感じられなくなった」。

ブラジルに見切りをつけた中村は、米国に新天地を求めた。実際に化学肥料工場で働き、永住も考えていた。だが、米国で知り合い婚約していた女性の一言が、夢追いがちな青年を現実に戻した。

「そんなバカなことをしていても根無し草に過ぎない」

これがきっかけで中村は日本に帰国。大学院を卒業し、中堅商社の課長に就職した。移住を志してから3年、26歳になっていた。

しかしそこは元ヒッピー。「1年ぐらいでノウハウを得たら、自分で会社

を作って金儲けをしよう」と漠然と考えていた。だが入社2年目、その思いは打ち砕かれる。薬理が土地投機に失敗し、経営危機に陥ったのだ。

「3500人いた社員が、2000人にまでカットされた。この時に、今までの世界観が変わった。遊び半分では世の中を渡っていけない。それからだね、危機感を帯びて仕事に臨むようになったのは」

誰もやったことのない仕事をしなければ、会社の中で生き残れない。そこで中村が目をつけたのが中国だ

った。当時の中国は文化大革命の直後で、不安定な政情が続いていた。大手総合商社はほとんど進出しておらず、足場を固められれば成功が見込める。

さらに中国には、思わぬ掘り出し物が眠っていた。旧西側世界ではあまり知られていなかったが、中国はレアメタルの大資源国だったのだ。

そこから中村は、レアメタルのトレーダーとして急激に中国にのめり込んでいく。79年に福建省でタンクステンとモリブデンを初めて開発。84年には広東省のレアアース鉱山を買収し、大きな利益を会社にもたらした。

しかし、社内の評判は高くなかった。レアメタルの儲けに味を占めたことで「際物にも手を伸ばしてしまった」からだ。

例えば、80年代後半に一大ブームを巻き起こした中国の育毛剤「101」。これを初めて日本に持ち込んだのは中村だ。しかし、当時の厚生省から販売認可が得られず、在庫の山を抱えることになった。ほかにも「中国産の瘦せる石炭や美顔ローラーなど、ほとんどが失敗した。要人と思われていたので



はないか。中村はそう苦笑する。

天安門事件を目撃

そうして中国に傾倒していた中村は、89年、信じられないものを目撃する。天安門事件だ。

「ちょうど北京に出張していて逃げ遅れた。政治権力が民主化を求める学生を鎮圧するのを見て、一気に熱が冷めてしまった」

中国での仕事をすべて部下に任せ、中村は旧ソ連に向かった。民主化を進めるゴルバチョフ政権が、学生を弾圧する中国と正反対に見えたのだ。

最初はお宝だったが、すぐにモスクワに家を構え「無許可の駐在員」として、旧ソ連を駆け回った。しかし会社はリスクを恐れて資金を出してくれない。体と知恵を使って、資源を探ししかなくった。元国家保安委員会(KGB)の職員を水先案内人として雇ったこともあった。

そんな時に出会ったのが、カザフスタンに豊富に埋蔵されているナタンだ

中村 繁夫(なかむら・しげお)氏

1947年京都府生まれ、59歳。在学中にブラジル、米国、ユーラシア大陸を放浪し、74年静岡大学大学院木材工業化学科修士課程修了、同年薬理入社。機能製品部、マテリアル部など資源関連部門でレアメタルの開発輸入に従事。2004年1月、MBOにより独立しアドバンストマテリアルジャパンを設立、社長に就任。2007年6月、アルコーフス副社長に就任。

▲東京・赤坂のAMJ本社オフィスで

った。旧ソ連から独立したカザフは資金難に陥り、工場での給料遅配が頻発した。そこを中村は見逃さなかった。

「あらゆる人脈を使って、国営のチタン工場トップと義兄弟のような関係を構築した。そして約3億円を融資する見返りに、カザフのチタンを独占的に輸入する権益を獲得した」

投資の割に利益は膨大。しかしこの契約は、中村の独断専行で本社の許可は得ていない。当然、日本では反発の声が上がる。

そんな声から中村を守ったのが、当時、薬理の社長だった中村久雄だった。「彼は孫悟空のようなもので、怖がることを知らない。しかし、商社は彼のような暴れん坊がいないと成長できない」(元薬理社長の中村)。

その後も中村は、旧ソ連地域で大きな利益を稼ぎ続けた。一方で、ニッケル詐欺事件に巻き込まれるなど、大失敗も繰り返した。そのたびに辞表を出したが、経営陣が守ってくれた。「損する以上に稼げばいい」。山師として、やりがいのある日々を過ごしていた。

しかしそんな日々は突然終わりを告げる。繊維事業の不振に不動産投資の失敗が重なり、株理の経営が悪化。2003年、大株主の旭化成と東レ、主要取引3行から金融支援を受ける事態に陥ったのだ。

中村はそこで「クビになった」。

退職金を元手にMBO

選択と集中による経営再建を進める株理にとって「大儲けするけれども、大損もするようなやつはいらぬ」。中村が率いていたレアメタルを扱う事業部門は、丸ごと外部に切り離されることになった。

中村にとっては、「手塩にかけてゼロから育てた事業」。やすやすと他人の手に渡すわけにはいかない。自宅に加え実家も抵当に入れ、個人保証もつけて資金を手当てし、株理に対して部門の買収提案をした。

しかし資本の論理は非情だ。株理の返事はつれないものだった。

「あなたには社会的信用がない」

反論できず、諦めるしかなかった。だがそんな時、中村はある経営者と運命的な出会いをする。非鉄金属商社・アルコニクス社長の正木英逸だ。

正木もかつて、中村と同じ境遇に置かれていた。日商岩井(現双日)が有利子負債の削減を進める過程で、社長を務めていた子会社ごと売却されることになったのだ。そこで正木は投資ファンドと組んでMBO(経営陣による企業買収)を実行。2001年にアルコニクスを設立して独立した。

「買収するから一緒にやらないか」

正木は中村にこう持ちかけた。渡りに船の提案のはずだった。ところが中村は断ってしまう。

「合併されるのは嫌だ」。そしてこう続けた。「30年間サラリーマンを続けてきた私にとって、これは第2の人生のスタートだ。誰かの下ではなく、自由にやってみたい」。



2006年12月、35年ぶりにブラジル・アマゾンを訪れた

中村は一度株理を「クビ」になった人間。普通ならば無理な相談だ。しかし正木はその意気を上しとした。「あなたは変わっているけれど見どころがある。自分の力でやってみなさい」。会う人を魅了する、山師の本領が発揮された。

そして2004年1月、中村はアルコニクスなどと組んでMBOを実施。AMJを設立して社長の座に就いた。その際中村は、資本金全体の約5%に当たる2000万円を拠出した。株理からの退職金のすべてを賭けた「大ばくち」だった。

正木はこう振り返る。「レアメタルの世界には専門的な知識が必要。中村さんには、個性派揃いのトレーダーたちを束ねる統率力と、バイタリティーがある。任せてみようと思った」。

その判断が正しかったことは、数字が証明している。AMJの売上高は2005年3月期の80億円から、2007年3月期には265億円にまで拡大した。経常利益は前期比4割増の7億5000万

円となり、アルコニクスグループの約4割を担うまでに成長した。

AMJの社員は現在20人。海千山千のトレーダーばかりだ。しかし中小企業にありがちな、馴れ合いの雰囲気はない。中村が「1年間で成績が一番悪かった社員に辞めてもらう」という方針を掲げているからだ。

だからといって、社員を突き放しているわけではない。裏側には、中村なりの優しさがある。

「AMJの中で最下位になって嫌な思いをするよりも、別の組織で個性を生かして1等賞になった方が幸せだ」。社員を辞めさせる際には、どの分野に適性があるのか見極めて、最後まで再就職の面倒を見る。

人情家の一面は、取引先からも高く評価される。取引先が来日した時は、パーティーを主催して歓待し、時には自宅に招くこともある。

学生時代から親交が深い建材メーカー・光洋産業の中国総代表、小幡哲は「小さなことにこだわらず、誰とでもすぐ仲良くなれる。敵を作ることがない」と言う。こうした人柄も、AMJが成長を続ける要因になっている。

浮き沈みを繰り返しながら、自らの会社を率いるまでになった中村。しかしその勢いはまだ収まりそうにない。

「レアメタルには“ロマン”がある。というのも、神様がそう決めたんじゃなくと思うほど、貧困な地域で取れるんだよね。電気も水道もない中で、貧しい人が必死に暮らしている。そういう所で資源を見つければ、貧しい人は幸せになれる。そのうえ、日本に持ってくれば国の発展にも貢献できる。これ以上のロマンはないでしょう」

中村はいつも、目を輝かせながら夢を語りかける。こんな山師なら、だまされたつもりで信じてみるのもよさそうだ。 —文中敬称略(小笠原 啓)